

# 薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 63 号

2012 年 6 月

## 新会長就任のご挨拶

日本薬史学会 会長 津谷喜一郎

本年4月より山川浩司前会長の後を受けて、日本薬史学会会長を勤めることになりました。1954年に設立された本会の初代会長の朝比奈康彦先生から数えて第6代目になります。第2代会長の木村雄四郎先生には北里研究所附属東洋医学総合研究所勤務時に海外調査のことなど教えていただいたことがあり、その頃1983年に本会に入会しました。WHO勤務時にはアジア各国の伝統医学の調査、政策・研究・教育支援などを行っており、この頃第2次戦争中の日本の科学政策の中に薬用植物資源の活用があることを知り「日本占領下のフィリピン薬用植物研究」(日本医事新報 1989; 3410:61-5, 3411:65-8)をまとめました。



1986年に北里研究所附属東洋医学総合研究所をWHOの伝統医学協力センターに指定したときにはWHO Scientific Group of Herbal Medicine Researchの会議を東京で開催し、その後第4代会長となられる柴田承二先生にご協力をいただきました。また薬効評価の歴史に関心を持ちまとめた「プラセボの日本受容-placebo はのりと薬だ-」(山田慶児, 栗山茂久(編), 歴史の中の病と医学, 1997)などは伝統医学に関係したことが契機となっています。2005年からは山川先生のもとで副会長と国際委員会委員長として、アジアで初の本学会のInternational Society of History of Pharmacy (ISHP)への加盟の仕事などをしてきました。

今後は、本会の活動をオープンで内外に開かれたものとし、他の学会とも協力しながら国際関係、特にアジア諸国との関係を強化し、また楽しい会にしたいと思っています。本会の活動がさらに発展できるように会員の方々のご支援とご協力をお願いして会長就任のご挨拶といたします。

### 津谷喜一郎会長のプロフィール

1950年福井県生まれ。東京医科歯科大学医学部卒業。同大学・難治疾患研究所臨床薬理学部門で佐久間昭先生に師事、医学博士。この間、北里研究所附属東洋医学総合研究所にて漢方医学と内科研修。1984-1990年WHO西太平洋地域事務局初代伝統医学担当医官。その後、ハーバード大学武見国際保健講座研究員、東京医科歯科大学難治疾患研究所臨床薬理学部門助教授を経て、2001年より東京大学大学院薬学系研究科医薬経済学客員教授。2008年より同・医薬政策学特任教授。2006年からMember of WHO Expert Advisory Panel for Drug Evaluation。主な著編書・訳書に『世界伝統医学大全』(訳, 平凡社, 1995)、『くすりエビデンス』(共編, 中山書店, 2005)、『臨床研究と疫学研究のための国際ルール集』(共編著, ライフサイエンス出版, 2008)、『日本で承認されていない薬を安全に使うーコンパッションエート使用制度』(共著, 日本評論社, 2011)、など。

## 日本薬史学会柴田フォーラム開催ご案内

下記により柴田フォーラムを開催いたします。会員以外の方もお誘いのうえ奮ってご参加ください。

日 時：2012年8月4日(土) 13:30～17:00  
会 場：東京大学大学院薬学系  
総合研究棟10階大会議室  
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

参加会費：無料

懇親会費：3千円(当日お支払いいただきます)

プログラム 受付開始：(13:00から)

13:30～13:40

開会挨拶：相見則郎委員長(千葉大学名誉教授)

13:40～14:40

座長：相見則郎先生(千葉大学名誉教授)  
花の青色発色機構、特にヤグルマギク、ツユクサ、  
アジサイなどの青について

武田幸作先生(東京学芸大学名誉教授)

14:40～15:40

座長：真柳 誠先生(茨城大学教授)  
中国薬学史活動の過去・現在・未来

郝 近大先生(中国薬学会薬学史専門委員会主任委員)

15:40～15:50 休憩

15:50～16:50

座長：真柳 誠先生(茨城大学教授)

中日本草文献の計量史学研究

肖 永芝先生(中国薬学会薬学史専門委員会委員)

17:00～18:30

懇親会 総合研究棟エントランスホール

### 参加申込・連絡先

折原 裕(東京大学大学院薬学系研究科)

TEL: 03-5841-4758 FAX: 03-5841-4758

### 申込締切

会場設営などの関係上、2012年7月27日(金)までにお申し込みいただければありがたく存じます。

### 会場案内

フォーラム当日は土曜日のため建物内に自由に入ることができません。龍岡門からのバス通り側入り口よりお入りください。案内板に従い10階大会議室までお進みください。

## 日本薬史学会2012年会(東京)のご案内

年会長：津谷喜一郎(東京大学大学院薬学系研究科)

日本薬史学会2012年会を以下の要領で開催します。皆さまのご参加をお待ちしております。

日 時：2012年11月17日(土)  
会 場：東京大学大学院薬学系総合研究棟2F  
講堂  
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

主催：日本薬史学会

後援：日本医史学会、他(予定)

年会事務局：東京大学大学院薬学系研究科医薬政策学

住 所：〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

電 話：03-5841-4828 FAX: 03-5841-4829

事務局長：根岸辰太郎

(東京大学大学院薬学系研究科医薬政策学)

E-mail: yakushi2012@gmail.com

URL: <http://yakushi.umin.jp/JSHP2012/top.html>

### [研究発表演題の募集]

一般演題：口頭発表 1演題約20分(演題数によって多少の変更あり)

### [演題発表申し込み方法]

下記の必要事項を記入し、年会事務局にお送りください。

### 演題申し込み締め切り：2012年7月20日（金）

発表者は、発表申し込み時点で日本薬史学会会員である方に限ります。

E-mail：ファイル添付形式にせず、メール本文に以下の必要事項を記入しお送りください。

- ①発表演題 ②発表者並びに共同研究者全員の氏名（発表者に○）と所属
- ③連絡者の氏名 ④所属 ⑤住所
- ⑥電話番号 ⑦FAX番号
- ⑧E-mail（勤務先の場合は所属を明記）

メールの件名に「演題申込み」とご記入ください。FAX送信用の紙媒体については、現在作成中です。

### [講演要旨の提出]

下記の要領に従って作成してください。

A4用紙を用い、余白は上下左右30mm、表題はMS明朝15ポイント、発表者氏名、所属は12ポイント、本文は10.5ポイントで、必ず枠内に収まるようにしてください。

### 要旨提出の締め切り：2012年9月7日（金）

### [年会参加申し込み]

下記の必要事項を記入し、年会事務局にお送りください。

E-mail：ファイル添付形式にせず、メール本文に以下の必要事項を記入しお送りください。

- ①氏名（フリガナ）
- ②日本薬史学会会員・非会員・学生
- ③所属 ④住所 ⑤電話番号
- ⑥FAX番号
- ⑦E-mail（勤務先の場合は所属を明記）
- ⑧懇親会参加の是非 ⑨合計金額

メールの件名に「演題申込み」とご記入ください。FAX送信用の紙媒体については、現在作成中です。事前参加申し込みは、10月31日をもって締め切り、それ以降は年会当日とさせていただきます。

### 参加費

1. 日本薬史学会年会  
会員（4,000円、当日参加は5,000円）  
非会員（6,000円） 学生（1,000円）
2. 懇親会  
会員・非会員（5,000円） 学生（1,000円）

### [当日の昼食について]

大学構内に当日土曜日も open している食堂がいくつかあるためそちらをご利用いただけます。

詳しい内容につきましては日本薬史学会2012年会のホームページ(<http://yakushi.umin.jp/JSHP2012/top.html>)をご覧ください。

## 2012年度日本薬史学会総会・公開講演会開催

日本薬史学会の2012年度総会は、4月21日東京大学薬学系総合研究棟2階講堂で開かれ、宮本法子理事の司会で開会。議長山川浩司会長の呼びかけで2011年度に亡くなられた辰野高司（名誉会員・元副会長）、斎藤元護（理事・北海道支部長）、徳久和夫（理事）の各氏に黙祷が捧げられました。

議題の2011年度事業報告、決算報告・監査報告が承認された後、新会長に副会長の津谷喜一郎氏が選出されました。

新会長が議長を務め、議題の新役員人事、学会運営組織が審議され、副会長に三澤美和氏が選出され、

常任理事に相見則郎、小川通孝、奥田潤、折原裕、西川隆の5氏が新任、五位野政彦、高橋文の2氏が留任、監事には小曾戸洋氏が新任されました。新理事に小倉豊、塩原仁子、竹中祐典、服部昭、平林敏彦、本田文明、松本和男、宮本法子、山本郁男、米田該典の10氏が、新評議員に阿部郁郎、荒木二夫、伊藤美千穂、小清水敏昌、船山信次、牧野利明、森本和滋の7氏が選出されました。学会運営組織では各委員会の委員長として、総務委員会が三澤副会長、財務・会員管理委員会が高橋、編集委員会が西川、企画委員会が小川、柴田フォーラム委員会が相見、

広報委員会が折原の各常任理事、国際委員会が津谷会長に、また各委員会委員もそれぞれ承認されました。

次いで議題の2012年度事業計画案、予算案が承認された後、新名誉会員に前会長山川浩司氏、前常任理事末廣雅也氏が推戴・承認され、津谷会長から推戴状が贈呈されました。

報告事項として、2012年会（東京）の開催準備状況（津谷喜一郎年会長東京大学大学院薬学系研究

科）、次いで北海道（事務局長吉沢逸男氏）、東海（奥田潤支部長）、関西（村岡修支部長）の各支部から報告が行われ、総会は終了しました。

公開講演会に移り、「わたしの放射化学研究の事始め」（田中彰元昭和薬科大学教授）と「女性化学賞と女性科学者の歴史」（相馬芳枝神戸大学特別顧問）の2講演が行われました。

恒例の懇親会が山上会館で開催され、すべての日程が終了しました。

## 林源十郎商店記念室の紹介

(株)エバルス 土岐 隆信

平成24年3月20日、岡山県倉敷市の大原美術館などがある美観地区の近くに「林源十郎商店記念室」<sup>はやしげんじゅうろう</sup>を開設いたしました。ここは、現在中国地方全域で医薬品卸売販売業を行っている株式会社エバルスの発祥の地であります。今から355年前の明暦3（1657）年、この地に林半右衛門由義が薬種屋「紀伊国屋」を創業し、以後「大坂屋」、「林源十郎商店」、「林製薬株式会社」、「株式会社林源十郎商店」、「林薬品株式会社」、「株式会社エバルス」と屋号・社名は変わりましたが、医薬品販売を続けてまいりました。

この度、社屋の移転により長年閉鎖していた昭和9（1934）年に建築された木造3階建ての本館、昭和10年に建築の当主の住宅と離れ、江戸時代に建築された蔵及び土地を倉敷市街地の発展を願い、倉敷

市などが出資した倉敷まちづくり株式会社の行う中心市街地活性化事業に協力し、寄託しました。建築当時珍しかった木造3階建てのランドマーク的な本館など建物、敷地全てについて、古いものを残しながらの大規模改装を行いました。

これを機に、倉敷の町で生まれ地域により育てられた弊社の歴史と、明治維新の頃活躍した第八代当主の「林孚一」<sup>はやし ふういち</sup>、そして明治・大正の頃キリスト教精神をもとに大原孫三郎、石井十次らと交流を深めながら社会福祉に尽くし、また製薬業を始めた「第十一代林源十郎」を特に取り上げ、倉敷市民や観光客の方々にこれらの歴史を知って頂きたいと願い、記念室を開設しました。この記念室の名称は、長年使用し地域で今でもよく知られている「林源十郎商店」を使用しました。記念室は3つのコーナーに分けて展示を行っています。

### 1. 林源十郎商店コーナー

明暦3年の創業以来の社業の歴史を展示しており、特に製薬に力を入れていた林製薬株式会社を大きく取り上げています。

大正3（1914）年玉野市の海岸でブロムの製造を始め、その後岡山市内に製薬工場を新設し、数々の新薬を開発するなど製造品目は68品目を数えました。戦時中は陸軍軍需医薬品の製造も手がけ、また、破傷風血清やワクチンなどの製造も行い、大



林源十郎商店全景





記念室内 (1)

阪、東京の卸を通じ全国に販売していました。「強心利尿剤ジンフィリン注射液」は名称も変わっていますが現在でも医療機関で使用されています。昭和25（1950）年に製造業を廃止し、以後は医薬品の卸売業として社業に励んでいます。このコーナーには江戸時代のものと思われる大きな薬筆筒や製造していた医薬品などを展示しています。

## 2. 林孚一コーナー

「林孚一」は、文化8（1811）年に児島郡に生まれ、林源介の養子となり、第八代大坂屋源介を襲名し薬種屋を継いでいます。幕末、京に上り、皇室が衰微していることを嘆き勤皇の志士と交友を深めますが、彼等の過激思想になじまず帰倉します。しかし、鈴木重胤、森田節斎に学んだ彼のもとには勤皇の志士が集まり、藤本鉄石や日柳燕石などとの交友が始まり、蛤御門の変の敗残の士を保護し、宿泊させ路



記念室内 (2)  
奥に見えるのが薬筆筒



林製薬の製品

銀を与え、志士の間で「備中の義人大坂屋源介」といわれるようになりました。孚一は勤皇の志士達他に多くの文人、実業家との交流があり、緒方洪庵、松山藩の山田方谷、箕作秋坪、品川弥二郎、児島の塩田王の野崎武左衛門、中国の文人画家胡鉄梅などその顔ぶれは多彩です。洪庵が郷里の岡山市足守の母親の米寿の祝いに大坂から帰って来た時に倉敷の大坂屋源介（孚一）を訪ねています。

ここには、洪庵が大坂に帰ってから出した礼状を展示しています。初代の窪屋郡長を努め、福祉、教育、土木事業に力をそそぎ、倉敷の町の発展に生涯をかけました。貧しい人々のための義倉の復興（続義倉）を有志と共にやったことは特筆すべきことです。

## 3. 第十一代林源十郎コーナー

「第十一代林源十郎」は慶応元年（1865）年に生まれ、明治25（1892）年に源十郎を襲名しています。倉敷にキリスト教の布教に来た同志社の創立者である新島襄の講演に深く感銘を受け、苦勞しながら同志社に進みキリスト教精神を学び、その後、岡山薬学校（その頃岡山に開校）で薬学を学びます。

その薬学生の時、医学生であった石井十次とキリスト教岡山教会で出会い、一緒に洗礼を受けています。以後、石井十次が岡山孤児院を運営するようになると、多額の寄付や医薬品の援助を行い事業の支援を行いました。明治34年に大原孫三郎が東京より帰ると、孫三郎より15歳年長でありましたが友人として交友を深め、孫三郎を石井十次に紹介し、孫三郎の社会教育・福祉事業や倉敷中央病院の開設

などの数多くの事業の支援を行いました。孫三郎が社会教育活動として日曜講演会を始めると、東京や京都などから当時最高といわれる講師を招くため、講師の選定や宿泊の手配、講演録の発行をはじめとして裏方の仕事すべてを行っています。

源十郎自身は勤勉節制の精神を基本に慎み深い生活をしており、陰ながら慈善活動やキリスト教会の設立を行うなかで、幼児教育の重要性を考え竹中幼稚園を設立し、特に幼児音楽教育に関心を持っていました。薬剤師のためにも尽力し、岡山県薬剤師会の第4代と第6代の会長を務めています。また長男の第十二代林源十郎は東京大学を卒業後、ドイツ留学を終え家業の社長を継ぎましたが、戦時の企業統合による岡山県製薬株式会社社長の社長を務めるなど県内の薬業振興に尽くし、第8代と第12代の岡山県薬剤師会長を勤めています。弟の林平三郎は東京大学を卒業後、家業の林製薬株式会社新薬部長に就きましたが、製造業の廃止にともなって北海道大学付属病院薬局長、東京理科大学に勤務しました。帰岡後、林薬品株式会社社長に就任し、岡山県薬剤師会第14代会長を務めました。もう一人の弟林清五郎

は林製薬株式会社技師長を退職後、熊本大学薬学部勤務しました。このコーナーには岡山出身の岸田吟香の手紙などを展示しています。

この小さな記念室は、岡山県の一地方都市である倉敷に生まれ、地域の福祉と健康を陰から支えてきた薬種屋の長い歴史と二人の先達らの歩みを中心にささやかな展示物とともに紹介しています。記念室は本館の2階に開設しており、庭園には来館者に楽しんで頂けるようないろいろな薬草・薬木の花壇を設けています。2階屋上テラスからは倉敷の大原美術館や美観地区の瓦屋根のすばらしい景色が見渡せます。建物、敷地全体は、「林源十郎商店倉敷生活デザインマーケット」として、倉敷の街の産物、ジーンズ、デニムのお店やレストランなどの店舗も入っています。岡山、倉敷への観光のついでにぜひお立ち寄りください。(敬称略)

**定休日** 毎週月曜日、年末年始

**開館時間** 10:00-17:00

**入館料** 無料

**所在地** 〒710-0055 倉敷市阿知2丁目23-10  
(通常は、係員は不在です)

#### 〔新刊紹介〕

### 書名：Editing Pharmacy (英文)、A5、641頁(2011)

著者：Prof. B.D. Miglani (インド、ニューデリー大・薬)

発行所：Association of Pharmaceutical Teachers of India

奥田 潤、夏目葉子

B.D. Miglani特任教授が、インド病院薬剤師会雑誌の編集者として、1964年の創刊号から2007年まで43年間、263項目の論説を書き綴った。本書はそれをまとめたものである。論説の項目は多岐にわたるが、そのいくつかを例示すると、

インド病院薬剤師会、薬物乱用と若者、インド薬学生連盟、十字路に立つインド病院薬局、障害者国際年、インドラ・ガンディー、薬学教育基準、健康保険と病院薬剤師、エイズ会議、2年制薬剤師の4年制薬学部への編入、アメリカ薬剤師、世界禁煙デー、インド医学・薬学会議、薬剤師倫理

規定、2002年薬学方針、薬業におけるチャレンジ、大学院大学の薬業実務教育

などが分かりやすい英語で書かれている。Miglani氏は1929年生まれ、専門は薬理学であるがジャーナリストでもあり、現インド薬学の重鎮である。本書の各項目は2?3頁で簡潔に書かれ、時事薬学英語のテキストとしても利用できる内容も多く、インドの最近40年間の病院薬剤師のみならず薬剤師をとりまく教育、社会問題について解説されている。インドの最近の薬学を知ろうとする諸氏の入門書として推薦したい。

## 辰野高司先生を偲んで

日本薬史学会 前会長 山川浩司

薬史学会の副会長を務められた辰野高司さんが、2012年2月19日に亡くなられた。ご家族のみで見送られたので多くの方々が知るようになったのはしばらく経ってからであった。東京理科大薬学部で辰野先生の指導を受けた1~5期の門下生により「辰野先生を偲ぶ会」が、外堀の桜が満開になった4月8日に市ヶ谷のアルカイダ会館で100名を超える人々が参集して開かれた。

辰野さんは祖父に日本の建築の創始者の辰野金吾教授、ご尊父にフランス文学の辰野隆教授の家系に生まれた。ご自身は薬学に進み東大薬学科の菅澤重彦先生の元で助手として研究出発された。当時、私も菅澤先生の元で有機合成の勉強を始め、研究室の助手であった辰野さんの魅力に当時の多くの薬学の若者とともにひきつけられた。研究室の枠を超えて集まった人々により、停電の暗闇になっても薬学の科学技術論と社会について盛んに討議が続けられた。辰野さんはまた東大薬学科内でバレーボールや野球で薬学の主力選手としても大活躍された。

前記の会合はその後、本郷のそば屋に移り永年にわたり続けられ、その当時には慶応義塾大学の薬化学研究所に移っていた私も三鷹の研究所から先輩の田原昭氏と参加して討議に加わり、やがて発展して「若い薬学者の会」となり、また神田で診療所を開いていた伊沢凡人さんが加わり「薬学を愛する者の会(薬愛会)」となった。

辰野さんは学位を取得されてから医学部の薬理に移り、黄変米毒の研究の浦口先生に化学の面から協力され黄変米毒素の構造を解明された。その後、東京理科大学薬学部の開設とともに教授として微生物学研究室を担当された。当時、八幡製鉄(株)基礎

研究所(所長、元東大理学部、水島三一郎教授)で有機鉄化合物から純鉄の製造と有機金属化学、非ベンゼン系芳香族化合物のフェロセンの化学研究をしていた小生に、そろそろ大学に戻って来いと言われ、形式的には東大薬学部の菅澤先生の後任の山田俊一教授の推薦で東京理科大薬学部の薬品製造化学講座の二代目教授として赴任することになった。

辰野さんはその後、理化学研究所に移られてから後任の上野芳夫教授と共同研究を進められ、「フザリウム属マイコトキシンの研究」に結実されて薬学会賞を受賞された。カビ毒の研究はその後も続けられ「松枯れ毒」の研究に取り組み、理化学研究所で定年まで続けられた。

辰野さんは日仏薬学会を組織され日仏薬学の交流に務め、また薬史学会の副会長として柴田承二会長を補佐され薬史学研究を支援され、小生が薬史学雑誌に書いた「分光計技術革新の研究および分離技術革新の研究」の論文に、日本の薬史学研究として評価する手紙(同様な手紙は石坂哲夫氏からも)を受けたのは大きな励みであった。辰野さんの研究と社会的活動は深い思い出として残されています。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。



学会誌刊行センターでの歓談 右から辰野先生、筆者、末廣先生

〔訃報〕 理事小倉豊先生が5月9日、癌研有明病院で逝去されました。68歳。先生は十年来、常任理事として本会運営に精力的に携わって戴きました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。



## 薬史往来 「くすりの歴史」に興味を抱いたこと

名誉会員 末廣 雅也

4月21日の日本薬史学会総会で理事を退任し名誉会員に推挙頂いたことを先づ関係各位に厚く感謝申し上げます。私の薬学への進学を振り返ってみますと中学生(旧制の七年制高等学校尋常科)の時に『微生物を追う人々』(ポール・ド・クライフ著 秋元寿恵夫訳)という細菌学者の伝記で評判の高かった本を兄がプレゼントしてくれたことに溯ります。内容に魅せられて将来はこの道に進もうという夢を持ち続けて、昭和18年に高等科は医学部を旨として理科乙類を選びました。

戦争は熾烈になり、海軍軍医の従兄も戦死したので、薬剤官は軍医よりも後方に勤務するので、薬学を専攻しようと考えました。昭和19年後半より半年は勤労働員の毎日で、大学の募集はないのではないかと感じていましたが、昭和20年1月に募集はあるが、入学試験は行なわず、大学は各高校の過去5年間の入学者数を基準に割当てて高校よりの内申書で審査するとの

こと。私の高校は東大薬学科へは毎年2人は入学しているので、よいのではないかと出願し、先輩が築いた実績に乗かって薬学生となり、8月の終戦で命拾ひをしました。

終戦前後の暗い時代に自分の若さだけを頼りの学生生活を送り、卒業後は三共へ入社することが出来ました。緒方章先生から講義や授業以外に研究室の会合で長井長義先生のお話を聞きました。三共へ入ってからは山科樵作先生から会社の恩人である高峰讓吉、鈴木梅太郎両先生の業績、逸話を教えられて、いつしか趣味としての薬史学を考えるようになりました。薬史学会に入会して定年退職後は本郷のYUビル内の山田光男先生の事務所で後日、薬史学会の事務局理事となる川瀬 清、山川浩司、高橋 文の諸先生らと話し合うようになりました。

柴田承二先生が会長になられてからはそのアドバイスでヨーロッパ医薬史蹟の旅に出かけたことも今となっては良き思い出となりました。

### 会員へのお問い合わせ

23年度の会費振り込みの件で、お振込みいただきました会員名が不明なものがございました。振込取扱店は「千葉小仲台」、振込年月日は平成23年5月25日、金額は一般会費7000円でございます。お心遣りの方は、事務局までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

### 日本薬史学会編集委員会

編集委員長：西川 隆

編集委員：荒木 二夫 小清水敏昌 砂金 信義 ヨング・ジュリア

## 薬史レター 第63号 2012年6月

編集人：西川 隆 発行人：津谷喜一郎

日本薬史学会 JSHP：The Japanese Society for History of Pharmacy

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内) 日本薬史学会事務局

tel：03-3817-5821 fax：03-3817-5830 <http://yakushi.umin.jp> e-mail：yaku-shi@capj.or.jp